

あたたためて

〈家庭の同行25〉

引きださされる力



NPO 法人くだけけ会代表

和田重良

1948年小田原市生まれ
くだけけ生活舎での共同生
活（人生科や農作業）をと
おして、青少年や家庭の生
活にさまざまなメッセー
ジを送っている。

「人生」旅のお伴

「くだけけ」のしていることは「人生」旅のお伴だ
なあとこの頃つくづく思っています。

子どもの旅にはお供というかお伴する「おとな」
が必要なのだと思うからです。

家族を離れてみる

ほくが行ってみたい所と言えは五能線の旅です。

時々、講演などを頼まれてどこかへ出かけることも
ありますが、たいていはどこへも寄りまらずにまっしぐ
らに会場へ行って講演したらまたすぐに帰って来る
のであまり「旅」という味わいはありません。

だから、何の用事もなさそうな秋田県から青森県
まで通っている五能線に乗って「遠くへ来たなあ
……」と思ってみたいのです。

旅のよさは何と言っても家を離れてみることで
その目的はもちろん「家のよさ」を見直して味わい
直してみることで。

きつと放浪癖のある人は別として、家庭や家族と
いう日常を離れて見直してみることができ、自分を
見つめ直してみることができるとなっていくの
です。

人生そのものが「旅」だという人もあります。そ
の場合には行く先や目的も含めて、何が起るのか分
らない不安というものも「旅」のようだというので
しょう。

いずれにしろ、家の中にいるだけとか家族の中で
過ごすだけでは分からないことだらけですから、子
どもが大人になっていく時に少しずつ家を離れてみ
ることが必要になっていくのです。

他人の釜の飯

子どもが大人になっていく時に、世の中にはいろ
いろな価値観を持っている人がいるものだなあと眺
めてみるのも「人生の旅」のよさだろうと思います。
自分の育った家庭や家族にはなかつた価値観を
持った人に出会うと子どもはちよつとしたショック
を受けます。でも、そうして視野を拓けていくので
行つた先でいろいろな景色を見られるように、他
人の釜の飯は特別な味わいを持っています。他所と
食べ比べないうちに「ウチのご飯が一番おいしい」
と言っていたのでは人生の「旅」としては残念なが
ら味わいの薄いものになってしまう。

ましてや、家の中に居てお母さんのおひざの上で
理屈だけ言っていたのでは人生の「旅」の出発点に
立つことはできません。

家にいるだけではコンビニ弁当は食べられても他
人の釜の飯を食うことはできません。

他人の釜の飯を食ってみて「やっぱり、おふくろ
の飯が一番うまい」なんて言ってくれたら何よりです。

家出適齢期

「15は家出適齢期だ」と言つた人がいましたが、15

歳が適齢かどうかは別として、家庭というのは自立
の訓練所ですから、いつまでもお母さんのおひざに
乗つていたのではお互いイライラして来てしま
うのです。

14歳の自己発見期の後は「自立」して行くのが自
然です。

活動範囲や行動半径が広がって行くのです。その
ための支援がそこまでの親の役割です。15になつ
たら、遠慮なく羽ばたいて行けるように、親の存在
のあり方を考えておかなければならないのです。

それができないのは、たいてい「親の心配症」です。
小さい頃から、つまづかないように、転ばないよ
うに、はみ出さないように、負担にならないように
と「自分でやりたい」ということにブレーキをかけ、
前から押えて来てしまつたのです。

この前、ご近所のお父さんが小さい男の子に自転
車乗りの練習をさせているシーンを目撃しました。
笑い話のようですが……お父さんは前からハンド
ルを押さえながら「もつとこげ、もつと思ひ切りこ
ぐんだ」と励ましているのです。

……ちよつと、ちよつと、自転車の練習する時には
親は後ろからそつと手を差し伸べていて、勢よく
こぎ出したら、いつの間にか手を放してあげておく

……これじゃあなきや子どもはうまく乗れませんが、
……と言つてあげたかたけど、仕方ないですよ、
他人だから。

案の定、一週間たつてもその親子は同じ練習して
いました。

子どもの自立して、転ばないように前から押えて
いたのじゃできません。二〜三回転んでみて初めて
知るコツが多いのです。

人についてみる

人生の「旅」には伴走者があるといひのです。思

自然の風景

最後のツクツク法師

突然頭の上で、「ツクツクツク、ウォーヅイツク
ツク」と初まった。

「おや、今日は何日だろうか？十月十八日、去年も一
昨年も十六日だったが、ああ、これが今年の蟬の終
わりか」

胸に涙み入る思いだ。

夏のツクツクボーシのように澄んだ声ではないが、
力一杯に張り上げて歌う歌声には微塵の悲しみもない。

春期入口までは、「親」がいいのでしようが、それ
以降は親以外の人についてみるのがいいのです。

学校の先生でもいいですが、なかなかついてみる
のに相応しい人に出会えないものです。

そこで、くだけけ会ではついてみるのにいい先生
方を何人も何人も紙面上や催しごとで紹介してい
るのです。

人生「旅」のお伴（お供）だと言っているのはそ
ういう意味です。

そう言えば、いま舞っている蝶も、トンボも、間
もなく死んでしまふだろう。コスモスもその辺の草
も霜が来ればみんな枯れるはずだ。それでも、だれ
も自分の運命を悲しんでいるものはない。悲しむも
のがあるとすれば、その移り変わりを見る人間だけ
だ。春の芽生え、夏の花の盛りを愛でようこぼ、お
せっかいな人間だけが。

大きないのちの営みは、悲しみ
でも、喜びでもあろうはずがない。



和田重正著「山あり、花咲きて 父母いませり」より